

## Ⅱ. 農地で発生する地域有機資源(2) 稲わら・麦稈

### 1. 特性

コンバイン等での刈り取りと同時に発生し、ほ場にすき込まれることが主な活用方法となります。ほ場にすき込まれることで貴重な有機物資源として土壤に補給されます。

表4 稲わら100kg中に含まれる成分量(kg)とC/N比の一例(滋賀農技セ調査 2018~2023年)

窒素 N	リン P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	カリ K <sub>2</sub> O	カルシウム CaO	マグネシウム MgO	ケイ酸 SiO <sub>2</sub>	炭素 C	C/N比
0.69	0.28	2.4	0.28	0.13	9.7	34.2	49.6

### 2. 期待される施用効果

土壤改善効果	肥料効果	炭素貯留効果	入手しやすさ
大	小	中	◎

### 3. 施用方法と留意点

施用量の目安	ほ場から発生する全量
施用法と施用時期など	稲わらは、年内にすき込む(なるべく秋に)。麦稈は、収穫後、次作前に速やかにすき込む。
その他留意点	○稲わらや麦稈がうまくすき込めない場合 ・高速で粗耕起ができるスタブルカルチを利用する(写真3)。 ・ストローチョップ等を利用して、わらや刈株を裁断する。

#### 稲わらの焼却による炭素、窒素のロス

稲わらは、焼却により残さ量が減りますが、同時に窒素や炭素が減少し、ほ場への投入量が減少してしまい、貴重な成分が失われてしまいます。

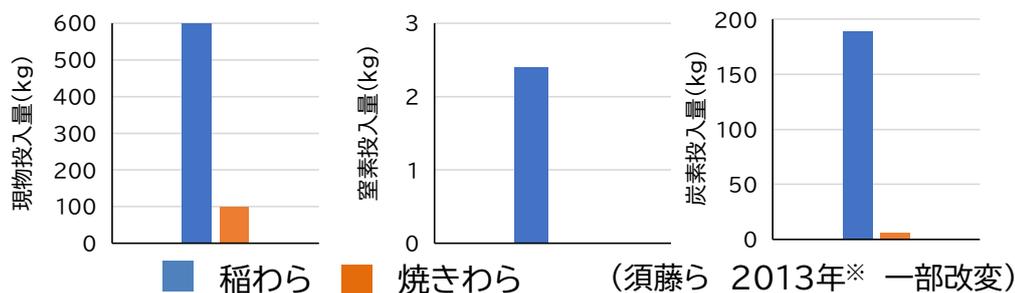


図6 稲わら、焼きわらの現物および窒素・炭素投入量



写真3 スタブルカルチでの粗耕起

※引用文献  
東北農業研究68, 33-34(2015)